

# 小学校体育の指導に関する研究 (1)

— 教員養成の立場から —

渡辺 敏子

(昭和63年9月30日受理)

## A Study of Guidance in Elementary School Physical Education Part 1

— From the Situation in a Teacher Training School —

Tosiko WATANABE

(Received September 30, 1988)

### はじめに

心身の発育、発達著しい児童期における体育・スポーツ的活動の重要性については、今更言う必要はないところであるが、近年における生活環境の変化は運動不足を一因とする種々の問題を起こしている。「運動不足」ということであれば「運動をすればよい」ということになるが、仲間、場所、時間といった運動環境を考えると、現状では、家庭や地域に望みは薄く、一番期待できる所は学校ではないだろうか。学校における体育・スポーツ的活動は教育活動全体を通じて行なわれるものであるが、教科体育の時間のみならず、学校における「体育・スポーツ的活動の時間」への期待は今後ますます大きくなるであろう。

さて、小学校における教科体育は他の教科に比べると、時として「息抜き教科」ということが聞かれる。筆者の講義の中で、「ドッチボールやバスケットボールばかりやった」「フォークダンスばかりやっていた」「先生は着換えしないで算数の○付けとっていた」「何をしたいかよく聞いていた」というような話が学生から聞かれたが、児童にとって楽しい時間(息抜き)であることはよいであろうが、教師にとっての息抜き時間であるような、計画性のない、適当な授業が実際にあることも否定できない。(研究熱心で一生懸命指導している先生方には申し訳けないが)

現在、小学校指導要領において体育科の目標は次のように示されている。「適切な運動の経験を通して運動に親しませるとともに、身近な生活における健康・安全について理解させ、健康の増進、及び体力の向上を図り、

※ 児童学科

楽しい明かるい生活を営む態度を育てる<sup>1)</sup>」このことは、児童の心身の発達にそったいろいろな運動の経験から、児童に運動することの楽しさを知らせ、生涯にわたって運動を愛好し、運動することに対して自発的、自主的に取り組める児童を育てることがねらいとしたものである。「運動の楽しさ」を知る、知らせるということが指導の原点になっているが、児童一人一人がどこでどう知り、理解していくのであろうか。教科の内容は先に述べた目標のもと、児童の発達特性を運動特性との関係から表Iに示した領域で構成されているが、これらの領域・内容と具体的にどう児童に展開していくかは教師の指導能力如何にかかってくる。

表I 運動領域

低 学 年	中 学 年		高 学 年
	3 年	4 年	
基本の運動	基本の運動	基本の運動	体 操 器 械 運 動 陸 上 運 動 水 泳 ホ ール 運 動
ゲ ー ム	ゲ ー ム	ゲ ー ム	表 現 運 動 保 健

ここ十年来、教職・体育関連科目の授業において学生の動作を観察していると、身体が重い、硬いといったことに加えて、自分の身体を自分の意志のままに動かせない無器用な学生が増えてきたように思える。ある程度は生まれもったものもあるだろうが、やはり現在に至るまでのその年代に応じた運動経験の乏しさ、深さとの関係ではないだろうか。現在の児童に限らず、学生も同様な生活環境の下で育ってきたように思われる。このような

学生が将来教師として体育の指導に携わることを考えると、学生の実態（体力・運動経験・運動技能・知識等）の把握が教師養成側としても必要となろう。

### 研究の目的・方法

体育の指導にあたって教師の運動技能が問われることがあるが、指導上必要とされることは指導能力である。運動ができること（技能をもつ）が必ずしも指導能力と一致するとは言えない。もちろん、運動ができて、指導ができることが望ましいが、教師に要求されることは本人の運動技能だけでなく、指導能力であり、その指導能力の程度が問題とされる。では、その指導能力を高めるにはどうしたらよいか、教師養成時期における体育関連科目において、望まれる指導内容を学生の実態と把握しながら検討していく必要があると思われる。今回はその資料を得るために実施した運動経験調査の中から以下の項目を取り上げ、結果を報告する。

- ① 小学校時期から高校時期に至るまでの教科体育（保健体育）で経験した運動種目への意識
- ② 器械運動系の技の経験と修得状況

尚、この調査は、昭和63年7月、児童教育専攻三年（教職課程履習者）を対象に質問紙法により実施した。尚回答者数は59名である。

### 結果と考察

#### 1. 経験した運動種目への意識

小学校時期、中学校時期、高校時期において教科体育（保健体育）で経験した種目への意識についての調査結果を表（Ⅱ）～（Ⅳ）にそれぞれ示した。（回答方法—各時期ごとに四つの種目を限度に自由回答）

小学校期における教科体育の運動種目への好嫌意識をみると、ポートボール、ドッチボール、バスケットボール、サッカーに好き意識が強くみられるが、鉄棒運動やマット運動、長距離走に嫌い意識が強くみられる。領域全体（調査対象学生は小学校時期、旧学習指導要領にて学習している一領域—体操、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動）でみると、ボール運動は好き意識をもっていた学生が多く、器械運動や陸上運動に嫌い意識をもっていた学生が多い。又器械運動は鉄棒運動を除いて、好嫌意識に個人差が大きく、水泳についても同様であった。中学校時期における保健体育の運動内容は、体操、個人

表Ⅱ 小学校時期における教科体育の内容についての意識

運動の内容	好 き	得 意	嫌 い
※ボール運動	19%	7%	5%
ドッチボール	31	12	8
ポートボール	37	22	0
バスケットボール	31	20	3
サッカー	24	2	0
ソフトボール	3	3	5
バレーボール	2	2	0
※器械運動	3	3	3
鉄 棒	8	8	42
マット	20	20	34
跳び箱	25	25	22
※陸上運動	12	12	17
短距離走	8	8	15
長距離走	2	5	31
障害走	2	2	8
高とび	0	2	7
走り幅とび	2	2	2
リレー	10	5	3
※ダンス	2	0	2
※水 泳	56	41	24
卓 球	3	3	0
なわとび	15	7	2

※は領域全て N=59

的スポーツ（器械運動、陸上競技、水泳）、集団的スポーツ（バスケットボール、バレーボール、サッカー）、格技（相撲、柔道、剣道）、ダンスの5領域が構成されており、各運動領域の運動種目の取り扱いについては、学校内の実状、男女の特性を考慮して、生徒の能力や適性を生かすために、種目の選択を可能とし弾力的に扱われている。このような取り扱いから、中学校時期における運動経験種目にも個人差があると思われる。

中学校時期における運動種目への好嫌意識は、バスケットボール、バレーボールなど集団的スポーツ領域に好き意識が強くみられるが、個人的スポーツ領域である器械運動の鉄棒運動や陸上競技の長距離走に嫌い意識が強い。又個人的スポーツ領域の水泳、ダンス領域についての意識は個人差が大きい。

高校時期における保健体育の運動内容の取り扱い、中学校時期とほぼ同様である。高校時期における運動種

目への好嫌意識は、中学校時期同様、集団的スポーツ領域に好き意識が強くみられるが、この時期に多く経験したと思われる対人スポーツ（テニス・バドミントン等）に対する好き意識も強い。器械運動や陸上競技種目への意識は中学校時期同様であったが、水泳についての嫌意識は強くなっている。

以上が小学校時期から高校時期までに経験した運動種目への意識である。今回の調査方法上、中学校時期、高校時期における各々の運動種目の経験者数は不明であるが、回答の比率から推測すると、中学校、高校時期における指導内容は、好き意識傾向の強い集団的スポーツや対人スポーツを中心に展開されていたところが多く、個人的スポーツである器械運動等の授業は少なかったように思える。

運動種目への好嫌意識を技能レベルとの関係は、運動種目の特性から必ずしも一致しないと思われる。各々の運動種目に対する好き意識と得意意識（自信）との関係を各時期を通してみると、器械運動や水泳のように個人の技能によって成り立つ領域・種目、又個人の技能レベルが直接結果に表われるような陸上運動・陸上競技の種目については両意識の関連は深い、集団的スポーツや対人スポーツなど、個人の技能程度が目立たないもの、又技能だけでなく、仲間のもつ技能との関係の中で成立するような種目での関連は弱いようである。尚、中・高校時期における集団的スポーツでの両意識は課外活動を通しての技能修得の程度が両意識の関係にかかわってくると思われる。

表Ⅲ 中学校時期における教科体育の内容についての意識

運動の内容	好き	得意	嫌い
※球 技	5.1%	1.7%	0%
バスケットボール	59.3	33.9	5.1
バレーボール	52.5	30.5	3.4
ハンドボール	3.4	1.7	1.7
ソフトボール	8.5	3.4	3.4
サッカー	1.7	0	0
テニス	3.4	1.7	0
卓 球	1.7	3.4	0
バドミントン	6.8	3.4	0
※器械運動	0	0	5.1
鉄 棒	0	0	22.0
マット	16.9	15.3	28.8
跳び箱	5.1	5.1	10.2
平均台	3.4	0	8.5
※陸上運動	10.2	13.6	22.0
短距離走	0	5.1	8.5
長距離走	3.4	10.2	23.7
障害走	0	1.7	8.5
高とび	3.4	0	0
走り幅とび	0	0	1.7
リレー	0	0	3.4
※ダンス	20.3	5.1	15.3
※水 泳	28.8	22.0	27.1
なわとび	1.7	0	0
ラジオ体操	1.7	1.7	0

※は領域全て N=59

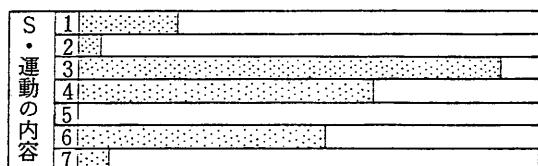
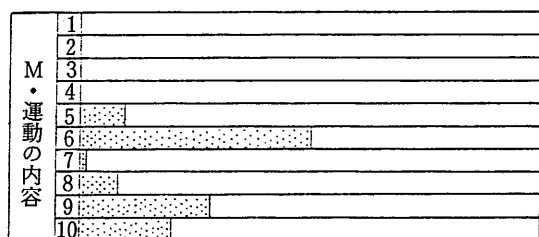
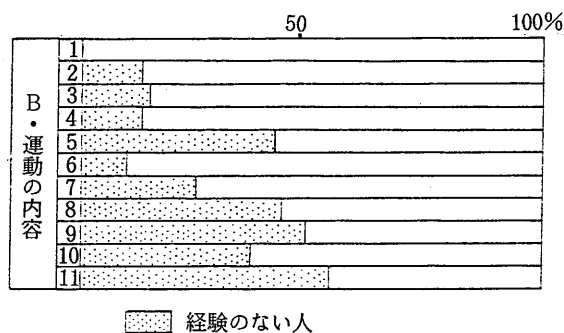
表Ⅳ 高校時期における教科体育の内容についての意識

運動の内容	好き	得意	嫌い
※球 技	5.1%	0%	0%
バスケットボール	59.3	16.9	3.4
バレーボール	50.8	11.9	5.1
ハンドボール	13.6	5.1	1.7
ソフトボール	5.1	0	5.1
サッカー	1.7	0	0
テニス	27.1	8.5	1.7
卓 球	8.5	1.7	1.7
バドミントン	30.5	5.1	0
※器械運動	1.7	1.7	3.4
鉄 棒	0	0	15.3
マット	13.6	3.4	22.0
跳び箱	3.4	0	5.1
平均台	0	0	10.2
※陸上運動	8.5	8.5	16.9
短距離走	0	0	1.7
長距離走	1.7	3.4	27.1
障害走	0	0	6.8
リレー	0	0	1.7
やり投げ	0	0	1.7
※ダンス	18.6	1.7	16.9
※水 泳	13.6	3.4	22.0
剣 道	1.7	1.7	0

※は領域全て N=59

表V 種目別・運動の内容

	鉄棒運動の内容	マット運動の内容	跳箱運動の内容
1	●逆上がり	●前 転	●横置・腕立て開脚跳び
2	●足かけ上がり	●前転開脚	●腕立て閉脚跳び
3	●足かけ前転	●後 転	●腕立て仰向け跳び
4	●足かけ後転	●後転開脚	●腕立て横跳び
5	●足かけ後転連続	●伸膝前転	●縦置・腕立て開脚跳び
6	●腕立て前転	●伸膝後転	●腕立て閉脚跳び
7	●腕立て後転	●側立前転	●台上前転
8	●腕立て前転連続	●腕立て側転	
9	●腕立て後転連続	●腕立て側転連続	
10	●踏み越し下り	●とび込み前転	
11	●転回前下り		



鉄棒運動—B      マット運動—M      跳箱運動—S

図I 技の経験状況

## 2. 器械運動の技の経験と修得状況

過去における器械運動内容(技)経験状況を種目別に図(I)に示した。尚、調査した運動内容は現行小学校学習指導要領・体育科編・基本の運動領域(1~3学年における固定施設や器具を使つての運動)と器械運動領域(4学年以降)に例示されている内容と、児童期における学習課題として可能(教材として)な運動を加え、表Vに示した。鉄棒運動の技を経験の高い順にあげると、1届逆上がり(100%)、6.腕立て前転(90%)、2.足かけ上がり(86.7%)、4.足かけ後転(86.7%)、3.足かけ前転(85%)、7.腕立て後転(85%)、10.踏み越し下り(63.3%)、5.足かけ後転連続(56.7%)、8.腕立て前転連続(56.7%)、9.腕立て後転連続(51.7%)、11.転向前下り(46.7%)であった。(ただし、5・8・9の技は、4・6・7の技からの発展)

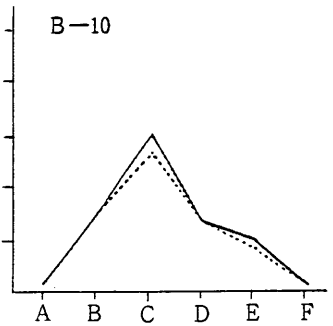
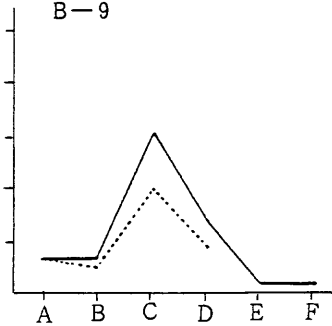
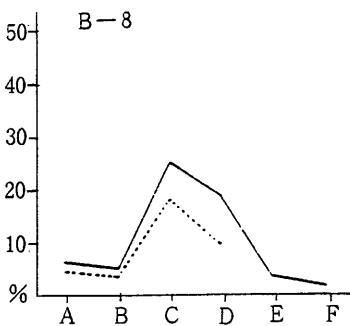
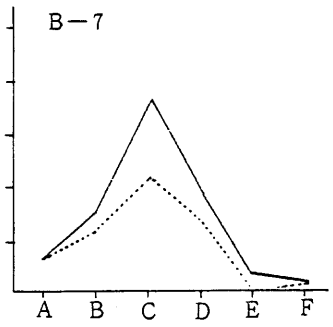
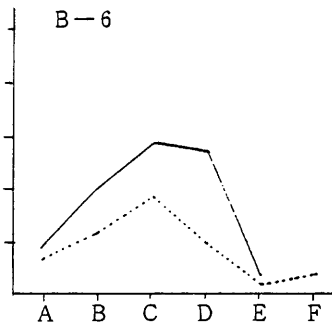
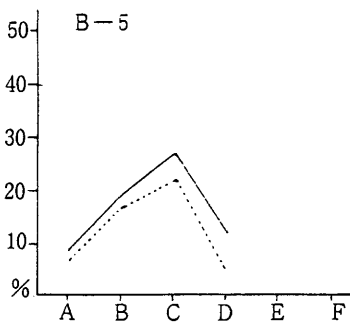
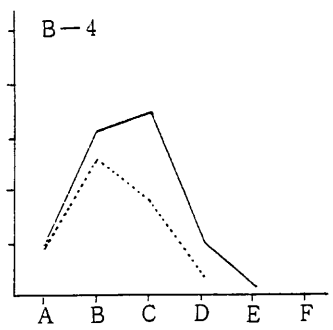
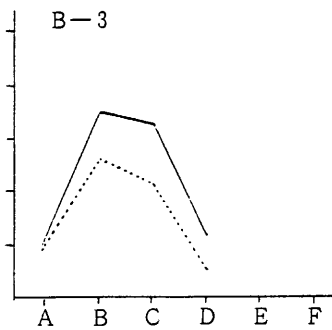
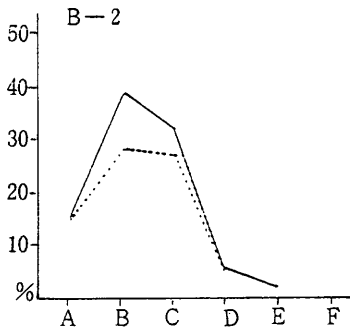
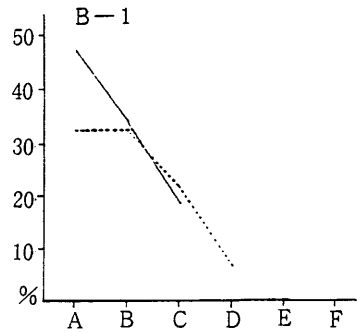
マット運動について同様にみると、1.前転(100%)、2.前転開脚(100%)、3.後転(100%)、4.後転開脚(100%)、7.側立前転(98.3%)、8.側転(91.7%)、5.伸膝前転(90%)、10.とび込み前転(80%)、9.側転連続(71.7%)、6.伸膝後転(50%)であった。(ただし、9は8の技からの発展)

跳箱運動についてみると、5.縦一腕立て開脚跳び(100%)、2.横一腕立て開脚跳び(95%)、7.縦一台上前転(93%)、1.横一腕立て開脚跳び(78.3%)、6.縦一腕立て閉脚跳び(46.7%)、4.横一腕立て横跳び(8.4%)、3.横一腕立て仰向け跳び(8.4%)であった。

以上が各種目における現在までの技の経験状況である。器械運動は運動経過に学習課題があり、技の難易性

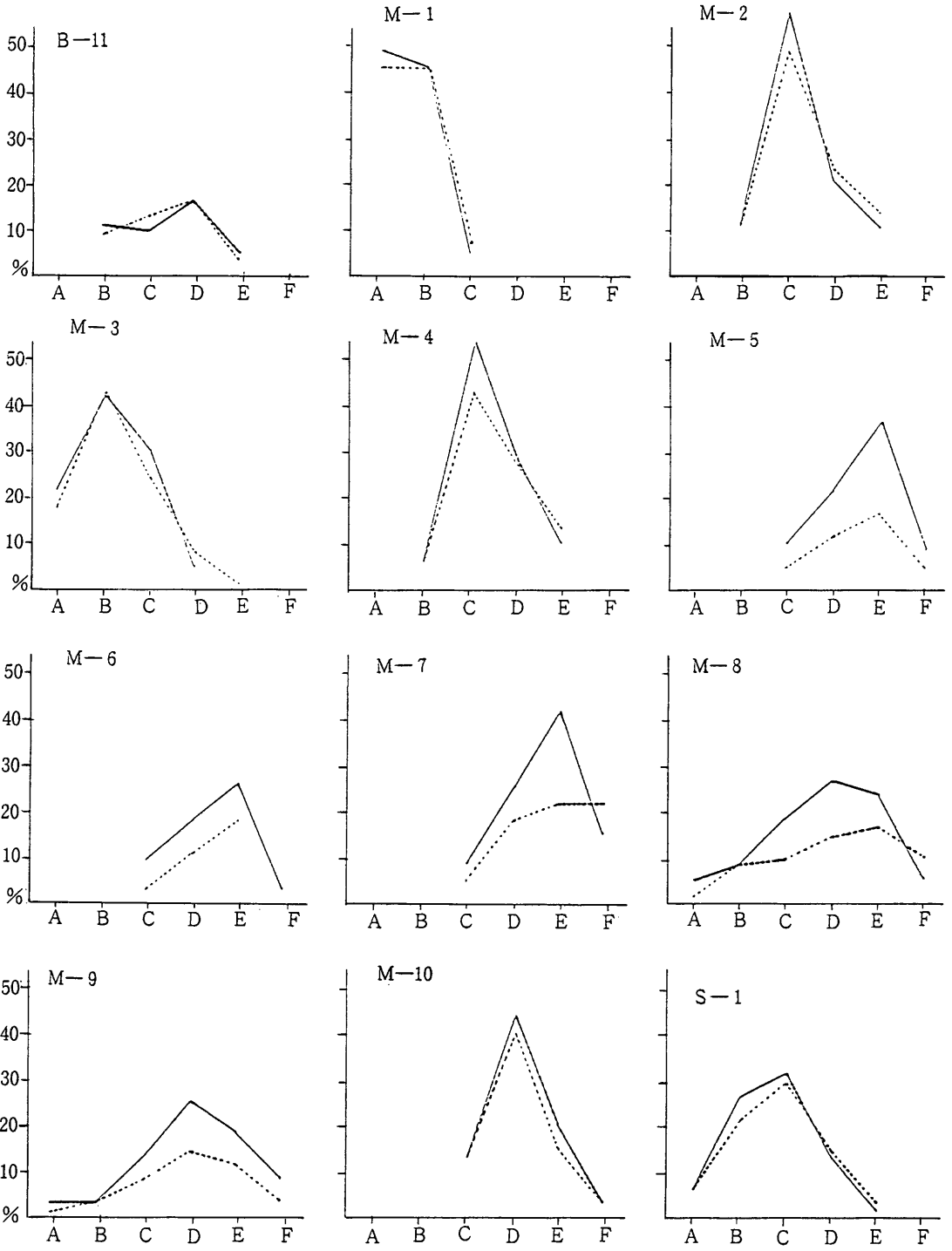
のみならず、技の系統性との関係から個人差も大きいと思うが、鉄棒運動の10・11、マット運動の6、跳箱運動の3・4・6の技についての経験の少なさが目立つ。又この結果については教師の教材研究との関わりとも考えられる。

図(Ⅱ)は、各種目の各々の技を経験した学生に対して初めて経験した時期とその技を修得した時期を示したものである。尚、図に示した記号は、A・幼児期、B・小学校低学年時期、C・小学校中学年時期、D・小学校高学年時期、E・中学校時期、F・高校時期である。

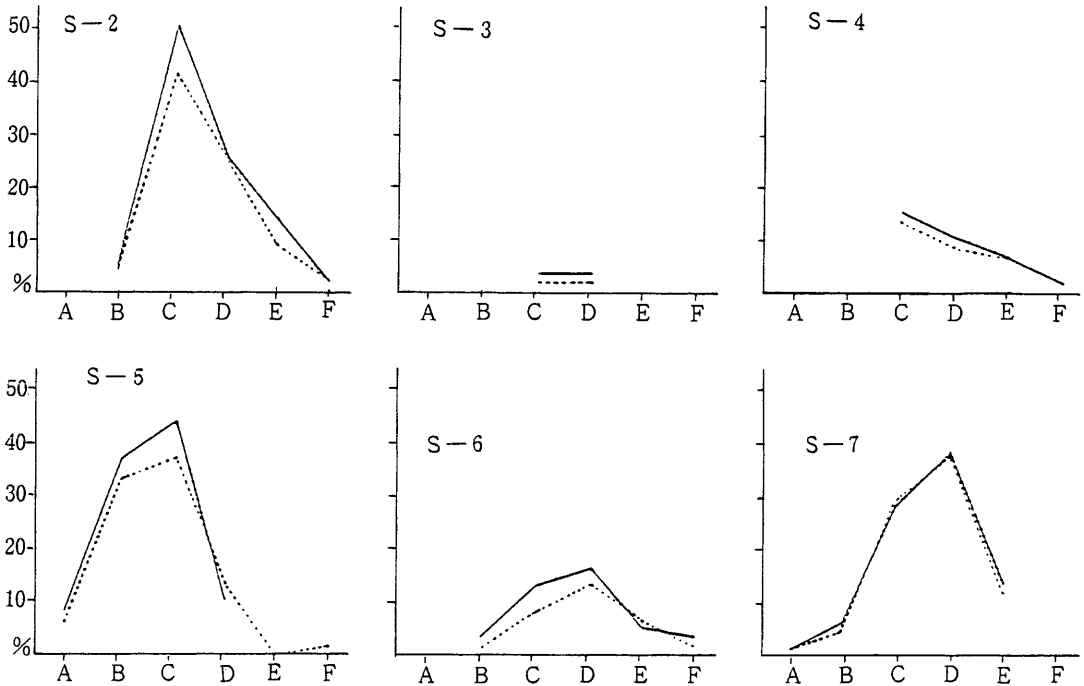


鉄棒運動 (B), マット運動 (M), 跳箱運動 (S) マット運動 (M)

図Ⅱ 経験時期と修得時期



図II



鉄棒運動の各々の技を修得率の高い順にあげると、10・跳び越し下り (100%)、11・転向前下り (100%)、1・逆上がり (97%)、2・足かけ上がり (83%)、5・足かけ後転連続 (80%)、3・足かけ前転 (73%)、7・腕立て後転 (73%)、4・足かけ後転 (70%)、9・腕立て後転連続 (68%)、6・腕立て前転 (67%)、8・腕立て前転連続 (62%) であった。

マット運動について同様にみると、1・前転 (100%)、3・後転 (98.4%)、10・とび込み前転 (98%)、2・前転開脚 (97%)、4・後転開脚 (97%)、7・倒立前転 (76.3%)、6・伸膝後転 (70%)、9・側転連続 (70%)、8・側転 (62%)、5・伸膝前転 (41%) であった。

跳箱運動では、4・横一腕立て横跳び (100%)、5・縦一腕立て開脚跳び (100%)、1・横一腕立て開脚跳び (98%)、7・縦一台上前転 (96.5%)、2・横一腕立て閉脚跳び (91.3%)、6・縦一腕立て閉脚跳び (82.2%)、3・横一腕立て仰向け跳び (80%) であった。以上が技の修得状況である。

経験した時期については、技の難易性と系統性などの関係から判断されると思うが、鉄棒運動と跳箱運動の技についてはほぼ小学校時代に、マット運動の5・6・7・8・(9)の技は中学校時代に経験した者が多い。経験

した時期と修得した時期との差は、個人差もあろうがその時期にとり上げられた学習課題が学習者にとって適切であったかという問題もあるが、技の経験数と修得者数の比率は教師側の指導上の問題点としても捉えることができよう。

学生が過去において、どのような指導をうけてきたかということは、指導する立場に立った時の指導場面に少なからず影響を与えるものと思われる。山門は「小・中学校の教師は器械運動が苦手できないものが多く、従って苦手好きでない器械運動を子どもに好きにさせることはできない<sup>6)</sup>」という教師観を指摘していたが、この領域は「できる」ことが好き、得意意識とつながる傾向が強く、反対に「できない」ことが嫌い、又苦手意識とつながる傾向が強いと思われる。教師の指導能力として、運動経験や技能レベル又種目に対する意識だけが問題となるのではないが、教材を解決する力(技能の分析等を含む教材研究の深さ)のみならず、児童の実態分析等、指導上必要とされる要因との関わりは強いと思われる。経験ない技、経験しても修得できなかった技に対して養成期間中に挑戦してほしいと思うが、技を経験する、あるいは身につけることだけでなく、その過程において各々の技の運動構造や系統性の理解、又指導する側に立

っての観察力をも含めた指導が養成側として必要となるう。

### おわりに

小学校の体育的活動への期待は、この指導に関わる教師の指導能力への期待でもある。「教師は現場に育つ」と言われるが、ほとんどの教科を担当しなければならない教師に体育の研究だけに時間をとることは無理であろう。養成機関においても「現場で生きる、生かせる」体育の指導能力が身につくように、教職・体育関連科目の内容の充実をはかっていかなければならない。

今回はこの検討資料を得るために実施した運動経験検査の中から二項目について結果を報告したが今後も学生の実態を把握するため調査内容を角度をかえて検討し、体育の指導を必要とされる「指導能力」についての研究を続ける予定である。

### 参考・引用文献

- 1) 文部省 小学校指導要領・体育科編 東山書房
- 2) 文部省 中学校指導要領・保健体育編 東山書房
- 3) 文部省 高等学校指導要領・保健体育科編 東山書房
- 4) 岩淵悦太郎他監修 小学校新学習指導要領の解説と展開・体育編 教育出版
- 5) 柳本有二他 小学校における運動種目嫌いに関連する要因について 東京体育学研究 12—23
- 6) 山門 昇 「「運動が嫌い」は器械運動がつくる？」 体育科教育 30—12 : 16—18, 1982
- 7) 岡田和雄「器械運動」 体育科教育 27—4 : 40—42 1979
- 8) 岡田和雄「運動嫌い」と「体育嫌い」 体育科教育 22—4 : 12—14, 1974
- 9) 梶浦英善他 小学校体育指導に係る指導者の意義について 日本体育学会第33回大会論文集 p856 1982
- 10) 鈴木一郎他 小学校教諭の教科体育に対する意義 日本体育学会第35回大会論文集 p-820 1984
- 11) 稲田俊治他 体育教師に関する研究 日本体育学会35回大会論文集 p-834 1984
- 12) 学校体育 33—8 日本体育社
- 13) 体育科教育 22—12 大修館書店
- 14) 体育科教育 27—5 大修館書店
- 15) 体育科教育 31—5 大修館書店
- 16) 小学校体育教科研究会'83編 小学校体育・楽しい体育の教科研究 日本体育社